データベース
神保宇嗣　2004–2008. List-MJ 日本産蛾類総目録.
米倉浩司，梶田　忠　2003–. BG Plants 和名—学名インデックス (YList).

(a234-[redacted] 神奈川県横浜市[redacted] Yokohama, 234-[redacted] JAPAN;
b184-[redacted] 東京都小金井市[redacted] Koganei, Tokyo, 184-[redacted] JAPAN)

新　刊

□林　将之：**葉で見わける樹木**（増補改訂版）B6. 303 pp. 2010. ￥1,940 ＋税．小学館．ISBN 978-4-09-208023-2.

本書は 2004 年に出版された小学館フィールド・ガイドシリーズ 22『葉で見わける樹木』に 48 頁 121 種を追加した増補改訂版で，野山や公園，庭で見られる樹木 471 種を掲載している．葉の形を，単葉か複葉，互生か対生，鋸歯縁か全縁の順序で分類し，専門家でなくとも簡単に葉の検索ができるようになっている．野山や公園に生育する樹木は，ほぼこの一冊でカバーできるので，樹木を探しながら持ち歩くのに適している．

本書に掲載される葉の写真はスキャナーで取り込んだものであり，著者が独自に考案した方法だそうだ．葉全体にピントが合い，自然な影のついた立体的画像が得られている．この画像により採取時の瑞々しさや質感が表現されることが，検索のしやすさに一役買っている．葉のスキャンの方法も本書内に記載されているので，自分なりの図鑑を作ってみるのも面白いかもしれない．600 dpi でのスキャンなら毛の様子の拡大も可能とのことだ．著者は樹木鑑定サイト「このきなんのき (http://www ne.jp/asahi/blue/woods/)」の主催者でもあるので，写真による鑑定のポイントを心得ているのだろう．葉の形に関する用語や形態学的特長による鑑別のポイントも丁寧にわかりやすく解説してあるので，野山や公園にある樹木の名前を調べたい人には最適な一冊である．（近藤健児）

□小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会（編）：**小野蘭山**　A5. 578+58pp. 2010. ￥12,000 ＋税．八坂書房．ISBN 978-4-89694-985-2 C1020.

蘭山の紹介は今さら必要あるまい．序文，略伝に続いて論文編 415 頁，資料編 150 頁のほか，巻末から逆に頁をふった 58 頁 (括弧付き頁) が加わる．本書の大部分の 578 頁は縦書き，後ろの 58 頁は横書きである．横書き部分は目次では執筆者紹介と編集後記としか出ていないが，実はここにも四編の蘭山研究が収められていて，論文編の目次の中で括弧付き頁で示されている．論文編は・蘭山と学問，・蘭山と自然，・蘭山と東西文化交流となっており，それぞれ 9 編，11 編，5 編が含まれる．中でも小野家当主の小野　強：小野蘭山蔵書の保存の思い出は，直系の子孫の乏しかった小野家の人たちが，苦労しながら貴重な遺品を災害や戦争から守ってきたいきさつを記している．蘭山関係資料は，2001 年に国立国会図書館に寄贈された．また米国で発見された門人・木内政章蔵書から，当時の医学界の情勢をうかがうことができる．資料編は・翻刻・解説，・編集資料で，蘭山の書簡 90 点が活字に翻刻され，名宛人の解説と共に見ることができる．そのほか門人録，年譜，略系図など，今後の研究に有益な資料を提供している．巻末に執筆にかかわった 26 名が業績とともに紹介されている．編集後記によると，最初は記念展を企画したものの，不況も手伝ってうまくゆかず，記念出版に方針を転換したとのこと．おかげで図録よりは後世に残る研究集録ができることになったのだから，企画者たちの努力は報われたと言うべきだろう．これと平行して，蘭山の顕彰碑を建てる企画も進んでいる．　(金井弘夫)

□大場秀章・田賀井篤平：**シーボルト博物学・石と植物の物語**　B5. 242pp. 2010. ￥3,600+ 税．智書房．ISBN 978-4-434-14579-7 C0045.

シーボルトがその医学伝授の見返りに，日本各地から集まる弟子たちに対して動植物標本を広く収集させ，それに基づいて Flora Japonica, Fauna Japonica を刊行したことはよく知られている．彼が求めたものは，日本の天然資源や民俗を知るための博物学的コレクションだったから，鉱物・地学標本も含まれていた．しかし動植物と違って，鉱物標本のまとめは未完に終わり，標本は博物館に収蔵されたままで時を経ていた．本書は大場氏による「シーボルトの植物物語」と，田賀井氏に

よる「シーボルトの石物語」の二部構成で，頁数としては半々の割合だが，私は石物語の中の「シーボルトの鉱物図鑑」を別建てとして，三部より成ると言っておこう．前半では，大場氏のかねての主張であるシーボルト像の発展的見直しと，コレクションにまつわるオランダの国内事情や人物像，それに関連する重複標本の東大への分与の動きなどが，彼独特の口調で語られ，最後に日本へ里帰りしたシーボルト標本の中から 20 点について，標本のカラー写真と解説が各 2 頁，ときには 4 頁にわたって記されている．田賀井氏はもともと結晶学の研究者で，東大総合研究博物館へ移ってから鉱物標本の整理研究にたずさわるようになったとのことだが，たまたまシーボルト植物標本の分与を機に、その鉱物標本の調査整理に引き込まれたのだそうだ．これも大場氏の巧みな誘導によるものらしい．鉱物の産地は，樺太から琉球にまでおよんでいるとのこと．鉱物図鑑では，「日本鉱物誌への第一歩」という副題で，32 種類におよぶ鉱物，岩石などが，豊富なカラー写真で示され，ラベルの記事についての検討結果が記されている．珪化木は 93 点もあり，現在でも第一級のコレクションだそうだ．Flora や Fauna に相当するラテン語が見つからないという．シーボルト研究はまだ終わりそうにないどころか，新たな展開が見込まれる． （金井弘夫）

□菱山忠三郎：**身近な樹木** 18×23.5 cm. 367 pp. 2010. ￥1,600+ 税．主婦の友社．ISBN 978-4-07-270521-6 C2077.

同じ著者の野草・雑草編が出たとき，「いずれ樹木についても期待される」と書いたが，その紹介文が出た頃には本書が出版されていた．今回の配列は場所別で，町なか，野原・里山，海岸，山地である．園芸植物はすべて町なかの部類に含まれる．写真はせいぜいルーペレベルの拡大なので，一応ながめておけば，実物に行き当たったときに「こんなものが見えるはずだ」と観察を深めることができるだろう．実物を見て「図鑑と同じだ」と認識することは悪いことではない．見ていれば図鑑と違うところがたくさんあるのだから．前著と共に手元に置くとよい． (金井弘夫)

□大場秀章・日本植物画倶楽部：**日本の帰化植物図譜** A4. 330pp. 2009. ￥9,333+ 税．ISBN 978-4-900358-65-2 C0045 アボック社

帰化植物 200 種類の全形および部分の原色画が一頁ずつ示され，続いて「解説」として同じ画の縮小白黒版を一頁に二点ずつ示し，和文と英文で簡単に性状，生育地，渡来時期などを記すと共に，制作者のメモや採集地の状況などの記事がある．作画者にはその標本を作ることを義務づけ，茨城県自然博物館で同定して保存してあり，その標本番号が付記されている．また原画に植物学的な誤りがないよう，大場氏がチェックしたとのこと．同博物館小幡和男氏の「帰化植物図と押し葉標本」の一文がある．最後に押し葉標本番号一覧として，標本ラベルのデータが示され，原画の作者のクレジットが表示されている．植物画家と博物館の連携の一つの望ましい行き方と思う．他の機会にも言ったことがあるが，原画には縮尺を示す「×0.68」のような表示が付いていて，望ましい配慮だと思うが，これはむしろスケールバーの方が有用だろう．この表示では「解説」頁のように画のサイズが変わったときに，無用というより誤解を招くことになりかねないからである． （金井弘夫）

□ Wu Z.G, Raven P.H. and Hong D.Y.: **Flora of China vol. 10. *Fabaceae*** 642 pp. 2010. Science Press (Beijing) and Missouri Botanical Garden Press (St. Louis). ISBN 978-7-03-026258-5/Q・2401, ISBN978-1-930723-91-7 (v.10).

Flora of China 第 10 巻マメ科が出版された．中国のマメ科植物は日本人にとっては中国植物志によって分かっていたことであったが，漢字の読めない人には未知の事柄であった．本書の出版によって英文で初めてその全体像が知られることになり，植物学上の大きな貢献となった．この成果は Flora of China 計画を通して中国植物全体についていえるものである．Flora of China は全 24 巻の計画で，1994 年に第 17 巻「クマツヅラ科からナス科」の出版に始まり，この第 10 巻で全 18 巻が出版された．これまでの出版によって 23,595 種の記載が終わり，中国の維管束植物の総数全体を約 31,500 種と見て，75% の記載が終わったという．この計画と共に Flora of China Illustrations も進められており，両者相まって植物分類学の偉大な成果が完成しつつある．両者の完結が楽しみである．

第 10 巻についてみると，学名が正され，key が整備され，記載が統一されるなど，中国植物志のマメ科が著しく改訂され，最新の形式が整え